

未熟のまま収穫 フェロモン誘発

リンゴ害虫 無農薬で抑制

弘大・城田准教授 「放任園対策に」

弘前大学農学生命科学部の城田安幸准教授(64)は15日、農業散布をしないリンゴ園でモモンクイガなど害虫の発生を抑制する研究成果を発表した。成熟前の未熟状態でリンゴを収穫することなどにより、害虫の繁殖を防いだ結果、発生数は数年で激減した。城田准教授は「農家の高齢化などで今後増える放任園を、無農薬未熟リンゴ果樹園として活用できるのでは」と提唱している。

(秋元宏宣)



青森市のほ場で無農薬栽培による害虫抑制の研究成果を説明する城田准教授

城田准教授は2007年

7年から、青森市など県内数カ所に無農薬リンゴ栽培の有機農業現場を設け、病虫害管理の研究を行っている。研究ほ場で08～10年の3年間、農薬を散布せず、園内に性フェロモンを誘発する約30センチ四方の粘着材を設置した上で、7月中旬、未熟リンゴの状態で収穫。その結果、08年に粘着材にかかったモモンクイガの1週間当たり捕獲数が平均188匹だったのが、09年は47匹、10年は15匹と減少したことが判明し

一方、これまで果実の結実に芳しい結果は出ていなかったが、食用酢を10年に2回、1年に1回散布し、有機堆肥を樹木周辺にまいたところ、5年目の今年、ほとんど病害のない果実が生育した。

城田准教授は04年、未熟リンゴには成熟果実の5～10倍のポリフェノールが含まれることを発見。未熟リンゴ25%と成熟リンゴ75%のジュースの「医果同効」と話している。

「06年には有機農業推進に関する法律が施行された。無農薬未熟リンゴ園として放任園を再活用する方策は有効」と話している。

